

時評

佐藤洋一郎

総合地球環境学
研究所副所長・教授



体験は、なかなか伝わらない。今回の震災であらためてわかったことのひとつがこれだ。津波についても、先人たちが「これより海寄りに家を建てるな」という石碑を多数残しているのに、その教えは結局守られることはなかった。

た。私たちは情報伝達というものを、おそろしく誤解している。伝える側が伝えたいと思っただけで、受け取る側にもちゃんと伝わるには限らない。理由はいくつもある。まず、伝達の手段。いまはデジタルの時代とは言ったが、媒体がこんなにも速く進化する

震災被害の恐ろしさ

る手段は時間を超えて使われることはない。ついこの間まで主力だったフロッピーディスクを読み取るマシンをもつ人はもうほとんどいない。CDなどの寿命も問題だ。アナログのデータは、たとえば虫食いの文書のように、部分が欠けても何とか読み解くこと

子や孫へ「語り継ぎ」を

文化の文字の場合は、解読の作業が要る。話し言葉の違いも障害になる。グローバルの時代と言われ、英語を話せる人も増えたが、相手の文化が理解できなければ、結局相手の言っていることもほんとうのところは理解ができない。情報を受け取る側の感性や

ないだろう。警告を理解する感覚は、歴史に対する理解から生まれる。その意味で、語り継ぎは、大事な伝達手段なのだろう。親子へ、祖父母から孫への語り継ぎが意味を持つ。体験のなまなましさ、恐ろしさなどの主観的な部分が、情報を心から心へと伝えるのだ。体験はその体験を共有したり、語り継がれて初めて伝わる。このことは地震や津波に限らない。体験は、子や孫に語り継ぐ努力をすべきである。津波被害に遭わなかった私たちも、せめてあの時の衝撃を語り継ぐのがよい。のちの世代には、残された映像はしよせん映像をみた体験を与えたいと思っ

ができる場合が多いが、デジタルのデータはたった一か所の不具合がすべてを失わせる。紙に書かれた文書なども寿命はたかだか数百年。石に刻んだ文字ならもつともつ。だが、そこに記された心は、誰かが注目してはじめて蘇る。それも、絶えてしまった

経験の問題もある。「何だ、石碑か」と思った瞬間、そこに書かれた文書は力を失う。私たちがとかく過去を離れた時代と考へがちだ。そうすると、石碑に刻まれた字面は読めても、心は伝わってはいない。さらに極端な話、「津波」の概念がなければ、そこに記された警告は何の意味も持た

るのではないかと思っ

執筆者略歴

◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。